

30-P2-127

頭頸部癌の放射線化学療法における副作用モニタリングシートの作成

○藤原 朋子¹、松尾 美咲²、三嶋 一登¹、池末 裕明¹、江頭 伸昭¹、大石 了³
¹九州大学病院 薬剤部、²聖マリア病院 薬剤科

【目的】当院では、頭頸部癌に対して抗悪性腫瘍薬 TS-1 と放射線を併用した治療 (TAR 療法) が施行される。これまで薬剤師は服薬指導を通して、患者へ TAR 療法の副作用およびその初期症状の説明を行ってきた。しかし、TAR 療法は 1 クールが 2 ヶ月間と長期治療であるため、頻回に患者を訪れる機会が得られない薬剤師にとって副作用の発見が遅れることが懸念される。そこで今回、我々は副作用の早期発見を支援するため患者用副作用モニタリングシートを作成した。
【方法】モニタリングする副作用項目は、TS-1 のインタビューフォームより発現頻度が 10% 以上のものを列挙した。また、副作用の発現しやすい時期を色分けし、経時的モニタリングでの重要項目と位置付けた。なお、疼痛時には痛みの評価も行い、その基準は Wong-Baker による 5 段階フェイススケールを用いた。
【結果】TAR 療法の治療の流れや主な副作用を記載した服薬指導シートに加えて、今回作成した患者用副作用モニタリングシートを用いることで、患者自身で注意すべき副作用を経時的に把握することが可能となった。また、薬剤師も服薬指導時に副作用を確実かつ迅速に確認できた。
【考察】今回、患者用副作用モニタリングシートを用いることで、患者側から医師、看護師および薬剤師に積極的に副作用を訴えることが可能となった。さらに、薬剤師も服薬指導時に副作用を確実かつ迅速に確認することができるようになった。これらのことから、患者用副作用モニタリングシートを用いることは、副作用の早期発見ならびに重篤化防止のために非常に有用であり、さらに円滑なコミュニケーションを図るツールともなり得ることがわかった。薬剤師が服薬指導時に口頭だけでなく、今回作成したような文書および図表を用いて患者の薬に対する理解を促進し、セルフマネジメントを支援していくことは今後ますます重要であると考えられる。

30-P2-128

簡易データベース構築と定期検討会実施による薬剤管理指導業務体制の充実

○安田 浩二、岡安 伸二、松浦 克彦、後藤 千寿、伊藤 善規

岐阜大学医学部附属病院 薬剤部

【目的】薬剤管理指導において、指導件数の維持・増加及び指導内容の充実を図るためには、薬剤師間で情報交換を行い相互に指導状況を把握する必要がある。当院では、これまで各種支援システムを利用して薬剤管理指導の効率化を図ってきたが、指導実績は個人の能力に依存している場合が多く、件数や指導内容を情報交換する機会は一部の検討会に限られていた。今回、薬剤管理指導の指導状況把握と指導内容の充実を目的に、院内 LAN 上から指導件数等を報告する簡易データベース (以下、DB) を構築し、同時に薬剤師間での定期的な検討会を開始したので報告する。
【方法】Microsoft Access にて、指導患者数・算定件数・退院時服薬指導加算件数等を入力する DB を構築した。DB は、院内 LAN 上の業務用パソコンから各担当者が毎週登録することとした。登録したデータは一括で集計し、グラフ化処理により視覚的に把握出来るようにした。指導担当者全員参加による検討会を毎週開催し、各診療科毎の指導件数、指導状況、及び問題点等の情報交換を逐次行った。
【結果・考察】市販 DB ソフトにより構築したシステムに各担当者が実績データを登録すること、データ処理が簡便化されると同時にリアルタイムに指導状況を把握出来るようになった。また、指導状況等を情報交換することにより、各部門への適正な人員配置が可能となり、指導件数の増加にも寄与出来た。各部門の指導状況における問題点を抽出し、特に問題のある症例については可能な限り指導期間中に症例検討会を開催し、より適正なアドバイスのもと、医師・看護師への情報提供や服薬指導の実施にフィードバックすることが出来た。データ処理の簡便化と定期的な情報交換により業務も効率化されたため、本体制を生かして今後はプレアボイド報告等の実施に貢献出来るようにしていきたいと考えらる。

30-P2-129

服薬自己管理チャート導入の試み

○長井 宏美、飯島 由美子、粉山 絵美、西山 美江、新木 美枝、柴田 朋子、菊池 佳代子、坂下 可奈子
群馬県立心臓血管センター 薬剤部

【はじめに】入院によって服用薬剤が変化するため、服薬指導など薬剤師の果たす役割は非常に重要である。患者が退院後も継続して良好な服薬状況を維持するためには、入院中から服薬自己管理を導入することが望ましいと考えられる。しかし、当センターにおいて、服薬自己管理を開始する際の評価基準は明確化されておらず、客観的な評価が困難であった。そのため、服薬自己管理が可能な患者にも看護師管理が継続されることがあり、退院後の服薬管理に影響することも考えられた。このような背景から、客観的な評価に基づいた服薬自己管理 (以下、自己管理) の開始が必要であると考え、評価基準を作成した。
【方法】1. 客観的な評価のためのチャートの作成
評価基準: STEP1 患者の ADL および会話の理解力などの評価
STEP2 服用薬剤の管理者 (看護師管理か患者自身) を決定
STEP3 患者自身が管理する場合、服用薬剤の理解度のレベルを評価し、調剤方法を選択
2. チャートを用いた自己管理の導入評価
平成18年10月～平成19年2月の間にチャートに基づき、自己管理を行った患者226人について、服薬指導記録から開始時の評価を調査した。また、自己管理中にアクシデントが発生することも考えられることから開始後の再評価についても調査を行った。
【結果】チャートを用いて服薬自己管理評価を実施した患者226人のうち、自己管理可能と評価されたのは223人であった。自己管理不可と評価された3人も調剤方法を一包化として再度評価したところ、自己管理可能となった。
また、自己管理開始後の再評価を実施したのべ87人のうち、3人が介助者による管理が必要と評価された。
【考察】チャートに基づき、服薬自己管理の開始評価を行った結果、適切に自己管理が開始できるようになった。このような評価基準を用いることによって、客観的な評価システムを確立し、共通の認識をもって服薬自己管理を開始できるようになったと考えられる。

30-P2-130

FOLFOX4 療法の患者向け説明書作成と副作用チェックシートの導入～副作用解析を基にして～

○佐々木 好美、樋口 美奈子、松尾 宏一、岩坪 沙奈恵、和田 依子、西野 弘章
公立学校共済組合 九州中央病院 薬剤部

【目的】FOLFOX4 療法には 5FU による骨髄抑制や口内炎、L-OHP による末梢神経障害などの副作用が報告されている。スケジュールも複雑であり患者説明用のパンフレット作成の必要があった。また入院期間短縮のため薬剤管理指導業務だけでは副作用をチェックすることが難しくなってきた。そこで薬剤管理指導業務を通じて副作用の種類、程度、発現時期等についての情報を収集し、その結果を基に患者向けのスケジュール・副作用説明書、患者自身が副作用をチェックするチェックシートを作成した。
【方法】平成 18 年 3 月より平成 19 年 6 月までの間に FOLFOX4 療法を行った患者 17 例を対象として薬剤管理指導業務を通じて副作用調査を行った (5 例は継続中)。結果を基に患者向けのスケジュール・副作用説明書、副作用チェックシートを作成した。
【結果・考察】施行回数は 1 ～ 10 回 (平均 5.2 回)。主な副作用は末梢神経障害 (92%)、食欲不振 (92%)、嘔吐 (38%)、倦怠感 (84%)、脱毛 (69%)、味覚障害 (46%) であった。尋麻疹や血圧低下のアレルギーは 7.8 回目に発現しており、頻度は少ないが十分な注意が必要であると考えられた。末梢神経障害は日常生活に支障がでるほどのものはほとんど見られなかった。また冷たいものを避けることである程度は予防できることが分かった。脱毛は治療開始後 20 日程度からみられた。味覚障害は一度起こると改善せずに治療終了まで続いている。これは食欲不振につながり、また日常生活に大きな影響を及ぼしていた。副作用調査の結果を基に作成した説明書は薬剤管理指導業務において十分活用できるものとなった。副作用調査の結果、副作用のほとんどは自宅に帰ってからのものであることから患者自身がチェックできるチェックシートを作成した。チェックシート活用は副作用早期発見へ有効であると考えらる。

30-P2-131

オピオイド説明書を兼ねた患者用疼痛・副作用チェックシートの作成

○岩坪 沙奈恵、樋口 美奈子、松尾 宏一、佐々木 好美、和田 依子、西野 弘章
公立学校共済組合 九州中央病院 薬剤部

【目的】がん性疼痛における緩和ケアは、患者の生活の質に大きく影響し、その重要性は高い。当院では、緩和ケアチームに薬剤師が発足時より参加し、当院のガイドラインの作成や職員教育などを行うことで、オピオイドの適正使用に努めてきた。しかし、服薬指導を行う中でオピオイドの導入や増量に、知識や理解の不足から抵抗感や不安感を示す患者が見受けられた。そこで、オピオイドに対する患者理解の支援と薬剤師の服薬指導の効率化を目指し、オピオイド説明書を兼ねた疼痛・副作用チェックシートを作成したので報告する。
【方法】オピオイドの作用機序や副作用、その頻度や発現時期、対策などの説明項目と頻度の多かった患者からの質問への回答項目を記載した文書、さらに患者自身が疼痛程度や副作用の発現状況を記入する表の二つを併記したシートを作成した。これをオピオイド導入時に患者に配布し、自身の状況を記入してもらった。こうして、患者のオピオイドに対する理解の支援と服薬指導、副作用のチェックに活用した。
【結果・考察】このチェックシートを活用する事で、第一に患者がオピオイドの働きを理解し、自身のオピオイド導入の意義や必要性を把握しやすい環境を整える事が出来るようになる。第二にオピオイドに対する説明と副作用を同一のシートで確認が出来るために、患者が自身の緩和ケアの状況を理解する事が可能になったと思われる。また同時に、薬剤師は患者がチェックシートに記入した副作用の発現状況や痛みの程度を確認する事で、オピオイドによる疼痛コントロールを評価することが出来た。これらのシートを作成、活用したことは患者のオピオイドに対する理解を助けると同時に、薬剤師にとっても指導の効率化に繋がったと考える。

30-P2-132

薬剤師病棟常駐前と常駐後の薬剤管理指導業務における薬剤管理事象の比較分析

○仲里 華子、小竹 武、和田 恭一、小林 勝昭、森下 秀樹
国立循環器病センター 薬剤部

【目的】薬剤管理指導業務は患者に対する薬物療法の適正化、施設経営、医療過誤防止などの観点から重要な業務として位置づけられており、既に臨床の有用性については報告されている。また、薬剤師が病棟に常駐化することによってプレアボイドの観点からも薬剤管理指導の質的向上につながると考えられている。今回、薬剤管理指導業務における薬剤師の病棟常駐前と常駐後の管理事象を比較分析したので報告する。
【方法】薬剤師が常駐化している心臓内科病棟において 2006 年 8 月から 2007 年 3 月までの 8 ヶ月間に薬剤師 1 名が薬剤管理指導業務を行った国立循環器病センターの入院患者 241 名を対象とし、薬剤管理指導記録から患者の訴えにより対応が必要であった事象、医療従事者への情報提供が必要であった事象を管理事象として取り上げ、2004 年に報告した常駐化前の調査と比較し検討した。
【結果】常駐後の全管理事象は 1661 件であり、特に注意すべき管理事象はインシデント 19 件 (1.1%)、副作用 141 件 (8.5%)、検査結果・血中濃度測定結果に留意する事象 91 件 (5.5%)、コンプライアンス等に関する事象 459 件 (27.6%) であった。常駐前の管理事象とその割合を比較するとインシデント、検査結果・血中濃度測定結果に「留意すべき事象」は減少しており、副作用症状、コンプライアンスに注意すべき事象は増加していた。
【考察】常駐化病棟では薬剤師が入院時にコンプライアンスの確認を行い持参薬、退院薬のチェックを行っているが、このことがインシデントの減少、コンプライアンスに注意すべき事象の増加として現れており、プレアボイドに寄与する結果となった。また副作用症状の確認も増加しており、常駐化することによって「有害事象」を捉えられている実態が明らかとなった。薬剤師が病棟に常駐し、薬剤管理指導業務を実践することでさらに薬剤師の適正使用が推進されているものと考えられる。